

## 【近況報告随筆】新生児と土偶

古澤義久

2010年11月、幸いなことに筆者は新生児の出産に立ち会うことができた。産声をあげて誕生した新生児をみて、どうかこの児が健康に成長できるようにといった祈りに近い気持ちを抱くとともに、新生児特有の様態をみて、別の感情が湧き出てきた。

「コンドンで出土した土偶に良く似ている。」

コンドンはアムール河下流のロシア連邦ハバロフスク地方コムソモリスク・ナ・アムールから北西約100kmのエヴォロン湖附近に位置する新石器時代の遺跡である。1962年から1972年にかけて14基の竪穴住居址が発掘調査された。1963年に発掘調査された3号住居址で土偶が出土している（第1図）。3号住居址は平面円形の竪穴住居址で、住居址内堆積層は3層に分層される。土偶が出土したのは、住居址北西側の立ち上がり部で、床面を覆う第3層から出土した（第2図）。第3層で確認された土器集中部（コンプレクス）は14箇所、いずれも新石器時代後期のヴォズネセノフカ文化期に属する土器が出土している。土偶は半身像で、頭部と胴部が並んで破片で出土した。高さ12cmである（Okladnikov 1973, Okladnikov 1981, Okladnikov 1983）。後頭部は後方に伸び、眉と鼻はつなげて表現され、目は細くつりあがっている。口はおちょぼ口で半開きの小さな口である。額に孔がある。腕の表現はほとんどない。

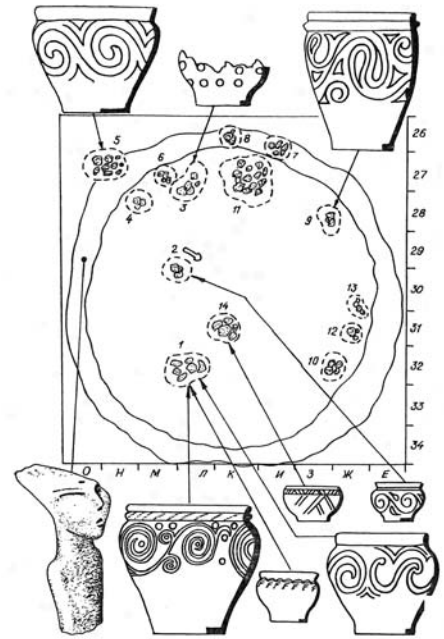
ヴォズネセノフカ文化期の土偶としてはスーチュ島出土の土偶（第3図）も著名である。コンドン出土土偶と同様に半身像であり、高さ6.6cmで、後頭部は後方に伸び、細くつりあがった目で、広い頬骨を持ち、鼻と口は穴で表現されている（Okladnikov 1981）。このような後頭部が後方に伸び、細くつりあがった目を持つ半身像の土偶はヴォズネセノフカ文化期に特徴的な土偶であるといえる。

オクラドニコフはコンドン出土の土偶について女性（Okladnikov 1973）であるとみており（Okladnikov 1973）、さらに限定的には、モンゴロイドの外見を持つ娘（Okladnikov 1983）であるとしている（Okladnikov 1983）。しかし、筆者としては、コンドン出土土偶は新生児の特徴に、より合致するのではないかと考えている。新生児は頭蓋骨が柔らかく、狭い産道を通るときに、後頭部が後方に伸びることが多い。また、目も充分に開けられないため、細く、口も半開きであることが多いという新生児の特徴もコンドン出土土偶と一致する。そこで、筆者としては印象論に過ぎないが、コンドン出土土偶をはじめとするヴォズネセノフカ文化期の一部の土偶は新生児をモチーフにしたのではないかと密かに考えている。コンドン土偶の額にみられる孔は解釈が難しいが、もしかすると、頭蓋骨の発達が充分ではないため生じた隙間である大泉門であるかもしれない。

後頭部が後方に伸びるという点では、人為的な頭蓋骨変形の可能性も考えておかななくてはならないが、これまでのところ、ヴォズネセノフカ文化期で頭蓋骨変形を行ったという積極的な証拠はない。後方に伸びる後頭部を持つ土偶は東北アジア全体では、沿アムール地域のヴォズネセノフカ文化期の土偶以外に、リドフカ1、クルグラヤ・ドリナ、ブラゴダトノエ3（Okladnikov 1989）、ウズコーヴォ1（Okladnikov 2001）などでみられる沿海州のリドフカ文化の土偶や豆満江下流域の西浦項6・7期の土偶（金用珩・徐国泰 1972《朝鮮遺蹟遺物図鑑》編纂委員会 1988）なども知ら



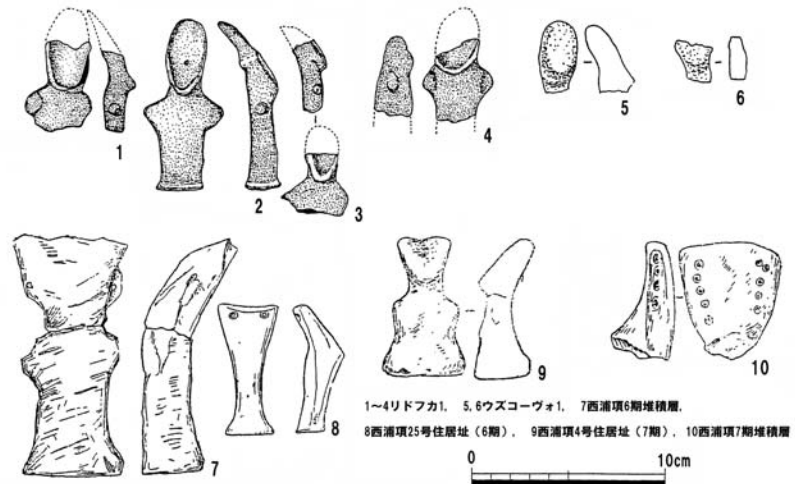
第1図 コンドン3号住居址出土土偶



第2図 コンドン土偶出土状況



第3図 スーチュ島出土土偶



第4図 リドフカ文化、西浦項6・7期の土偶

れる。リドフカ文化や西浦項6・7期の土偶は後頭部が後方に伸びるが、顔面には目鼻が表現されないという特徴がある(第4図)。金材胤は沿アムール地域のヴォズネセノフカ文化期の土偶と沿海州のリドフカ文化等の土偶に関連があると想定しているが(金材胤 2008), リドフカ文化や西浦項6・7期は青銅器時代で, ヴォズネセノフカ文化よりも後行し, 時期的な併行関係にないので, 直接の関係は想定しがたいだろうと筆者はみている。ただし, 土器においては新石器時代終末期に沿アムール地域から沿海州へ影響関係がみられるので( , 2002), リドフカ文化や西浦項6・7期の土偶の祖形に影響を与えた可能性はあるかもしれないと考えている(古澤 2014)。もし, 関連があるとすれば, リドフカ文化や西浦項6・7期の土偶も新生児との関係を考えなければならないだ

ろう。

その後、さらに幸いなことに、つい最近2016年3月にも新生児の出産に立ち会うことができた。陣痛から出産までの時間が短く、無事の出産に安堵するとともに、ぷっくりと腫れぼったく、むくんで閉じた新生児の目をみて、またしても別の感情が湧き出てきた。

「目が遮光器土偶にそっくりだ。」(註1)

遮光器土偶は日本列島縄文時代の土偶を代表する著名な土偶で、東北地方北部を中心とする地域に縄文時代晩期前半に盛行した土偶である。周知のとおり、遮光器土偶の名称の由来は、目の表現が遮光器を示しているという説にあるように、目が特徴的な土偶である。

遮光器土偶の目が何を表現しているかについてはさまざまな説があるが、新生児の目を表現しているという説も既に提示されたことがある。美術評論家の瀧口修造は「私は、この大きな目の偶像からは常闇を感じる。かれらの凝視しているのはまるで巨大な闇であるように、あるいは生れ落ちた瞬間、まだ明るみに慣れない嬰兒の目のようだとも言える」と述べている(瀧口 1959)。しかし、新生児の目の表現であるとする説以外にも多様な説が提示されている。

亀ヶ岡で大型遮光器土偶(第5図)が発見されたとき、神田孝平はその目について「眠りタル姿二似タリ」と述べた(淡厓 1887)。名称の基となった遮光器説は、坪井正五郎によって提示された説である。坪井は当初、防寒具であると考えていたが(坪井 1890)、その後、雪から反射する光を遮って

目を保護する遮光器を表現していると考え(坪井

1891)、遮光器土偶という名称の基となった。し

しかし、この遮光器説には早くから反論が提示され

ており、N.G.マンローは原始時代の人民は目を

重要視するので、人の目を大きく表現しても不思議

ではないとし、死んだ人の目が眠っている人の

目であると思われぬこともない述べ、遮光器

ではないとした(マンロー 1908)。江坂輝彌は抽象

化が進んだ土偶に、突然具象的な遮光器表現が

出現することを疑問としながら、眼そのものを極

度に誇張した土偶特有の表現であると指摘してい

たが(江坂 1960)、その後、初現期の遮光器土偶

の類例の増加から、やはり眼部を次第に誇張した

ものであるという確信を得たと述べた(江坂

1990)。米田耕之助は、縄文土偶が当初、誕生の

意味でつくられたが、時期を追うに従って死を意

味するものへと変化したと述べ、遮光器土偶は死

を意味する、より具体的な方法として目を閉じた

状態を示し、異常なまでに大きく目を誇張したも

のと主張している(米田 1984)。我孫子昭二は宇



第5図 青森県つがる市亀ヶ岡出土遮光器土偶



第6図 藤沼邦彦による遮光器土偶の変遷

鉄出土土偶の観察から、遮光器端部の切り込みは耳ではなく、眼帯のような仮面であるとみて、大型遮光器土偶の正体とは仮面を被った土偶であると述べている（我孫子 1999）。ここで紹介した諸見解は一部に過ぎないが、遮光器土偶の目については定見がなく、百家争鳴状態であることがわかる。

なお、遮光器土偶のあまりの異形さゆえ、宇宙人がモデルとなっているという言説が人口に膾炙している。橋本順光の研究によると、カルトと化した UFO 団体である宇宙友好協会（CBA）が提唱し、ソ連の SF 作家 . . . カザンツェフが広めたということが明らかになっている（橋本 2009）。CBA の鷲尾功は宇宙服の開閉式大型遮光眼鏡とみており（鷲尾 1962）、カザンツェフは眼が大きいことから地球より少ない光の場所の生物であるとみた（無記名 1962）（註2）。縄文時代の宇宙人についての存在は確認されていないので、可能性はまずないといってよい。

ところで、遮光器土偶の変遷については既に多くの研究がなされている（野口 1960、鈴木 1990、藤沼 1997、我孫子 1999、原田 2010ほか）。問題となるのは、遮光器状の目の成立過程であるが、鈴木克彦は縄文時代後期末の土偶に粘土を貼り付けた団子目の膨隆した眼部に横位に刻目状沈線を入れたものが祖形となったと述べている（鈴木 1990）。江坂輝彌も小さな目から大きな眼へ変遷したことを述べている（江坂 1990）。藤沼邦彦はⅠ段階（遮光器状の目が成立する前）Ⅱ段階（遮光器状の目が成立）Ⅲ段階（遮光器状の目がさらに型式化）Ⅳ段階（遮光器状の目が衰退）という変遷を想定している（藤沼 1997）（第6図）。いずれの見解でも縄文時代晩期前半の遮光器土偶が縄文時代後期の土偶に系譜が求められることが示されている。

このような変遷観からみれば、マンロー以来、江坂らによって主張された目を大きく強調するようになったという見解が最も説得力があるように感じられる。藤沼の設定した段階の中で、新生児の目に最も類似しているのはⅡ段階とⅢ段階である。遮光器土偶の目が新生児の目をモチーフにしたとしても、そのモチーフは後から加味されたとせざるをえないのではないだろうか。

それでは、新生児または乳幼児をモチーフにしたことが確実にわかる土偶は存在するのであろうか。東北アジア全体を見渡してみると、妊婦像は遼西地域の紅山文化に属する東山嘴（郭大順・張克挙 1984）や牛河梁 N5 SCZ 2 堆積層（郭大順等 2012）などで確認されているが、新生児または乳幼児そのものを表現した例は（筆者が密かに考えるヴォズネセノフカ文化の一部の土偶を除外して）ほとんど確認されない。縄文文化では、妊婦像は非常に多く、中には、出産の場面をモチーフにした土偶も確認されているものの（小野 1987）、このような事例では新生児は頭部のみ表現され、新生児をどのように把握していたのか理解するのは困難である。こうした状況下において、縄文文化では僅かではあるが、新生児または乳幼児をモチーフにしたことが確実な事例が数点知られている（江坂 1990、忽那 2009、山田 2013）。

東京都八王子市宮田 A - 4 号住居址（宮塚・梶田 1972、1978）では乳児を抱き抱えている土偶が



第7図 乳幼児が表現された土偶

1宮田,2上山田,3沖中

出土している（第7図 - 1）。時期は縄文時代中期前半である。単に乳児を抱いているのではなく授乳しており、乳児は手足の表現がなく何かに包まれているとみる見解（山田 2013）もある。乳児の顔面は刺突により眉、目、口を表現している。

石川県かほく市上山田貝塚出土土偶（江坂 1960, 1990）は1920年代に発見された土偶である（第7図 - 2）。時期は縄文時代中期であるとみられる。乳幼児を背負っている土偶であるが、乳幼児は背をむけているので乳幼児の表情は窺えない。

青森県三戸郡三戸町沖中（三戸町教育委員会編 2000）では乳幼児単体の土偶が出土した（第7図 - 3）。時期は縄文時代晩期である。おくるみのようなもので包まれ、乳幼児の顔面は刺突により目や口が表現される。背面には入り組み文が施文される。

このように乳幼児を表現した土偶があるが、その表情は刺突により簡単に表現され、新生児や乳幼児に特有の様態を表現したとは言いがたいものである。特に、沖中例は遮光器土偶と地域的にも時期的にも関連があり、乳幼児が単体で表現され、宮田や上山田のように母体に付随する乳幼児ではない点で注目されるが、それでも目の表現も簡素なもので、遮光器土偶にみられるような腫れぼったく、むくんだ目は表現されていない。このような事例が存在するとなると、遮光器土偶の目は新生児の目とそっくりなのは事実であるが、新生児の目をモチーフとしたとみるのは難しいかもしれない。

もう一つ、興味深いことがある。コンドンなどのヴォズネセノフカ文化の土偶では、目だけでなく、口や後頭部の表現など、新生児を思わせる様態が複数の部分で認められる。一方で、遮光器土偶の場合は、新生児と共通するのは、目のみである。遮光器土偶の中には豊かな乳房が表現されているものもみられ、胸部は基本的に成人女性をモチーフにしたとみてよい。そうすると、仮に新生児の目をモチーフとした場合、顔面と胸部で年齢が異なるちぐはぐな表現ということになる。

ただし、顔面と胸部で年齢の異なるちぐはぐな土偶が存在しないとはいえない。ここで、想起されるのは、ヒトばなれした表情からみて、土偶は縄文人にも不可視の力のイメージ、精霊を表現したものであるという小林達雄の見解である（小林 1986, 1988, 1990ほか）。顔面と胸部でそれぞれ表現したい対象が異なるとすれば、現実の人物を写実したものとはみられないので、土偶精霊説も十分に可能性があることではある。

裕理ちゃん、準くん、生まれてくれてありがとう。どんなふうに成長するか楽しみです。いつも元気で健康であれば、ほかに何も望むことはありません。そして、大変な出産を頑張って、元気な子どもを生んでくれた妻の潤姫に感謝します。ありがとう。出産のとき、男は何の役にも立たないといいますが、全くもってそのとおりです。土偶のことを考えていました。ごめんなさい。裕理ちゃん、準くん、潤姫、どうかこんな父・夫を許してください。



西海考古を主導されている古門雅高さんがこの3月で定年退職され、一つの節目を迎えられましたことをお慶び申し上げます。最初に配属された学芸文化課で大変、お世話になりました。当時の学芸文化課は凄惨な職場でしたが、時折、考古学のことについて古門さんと話したことは、何とか出勤する原動力となっていたと思います。これまでお疲れさまでした。今後ともよろしく願いいたします。

(2016年3月31日脱稿)

#### 【註】

- 註1 この出産には女兒(5歳)も立ち会っていたが、やはり「ドグー、ドグー」と連呼していた。この女兒は考古学の本をみたり、筆者の地表調査に同行するなど考古学に親しんでいるため、幼稚園園庭で採集した磁器片や煉瓦片を提出し、先生を困惑させたことがある。
- 註2 但し、カザンツェフが例示した土偶には関東地方縄文時代後期中葉に盛行した山形土偶が含まれる。

#### 【引用・参考文献】

##### 日文

- 安孫子昭二 1999「遮光器土偶の曙光」『土偶研究の地平3』勉誠出版
- 江坂輝彌 1960『土偶』校倉書房
- 江坂輝彌 1990『日本の土偶』六興出版
- 小野正文 1987「山梨県釈迦堂遺跡群出土の「誕生土偶」」『考古学ジャーナル』272
- 忽那敬三 2009「先史時代の“子ども”」『チャイルド・サイエンス』5
- 小林達雄 1986「縄文土偶の顔」『歴博』16
- 小林達雄 1988「男と女」『古代史復元3 縄文人の道具』講談社
- 小林達雄 1990「縄文土偶の世界」『季刊考古学』30
- 三戸町教育委員会編 2000『沖中遺跡・沖中(2)遺跡発掘調査報告書』三戸町埋蔵文化財調査報告書第1集
- 鈴木克彦 1990「遮光器土偶」『季刊考古学』30
- 瀧口修造 1959「土のなかの生命」『日本の土偶』紀伊國屋書店
- 淡 厓 1887「瓶ヶ岡土偶図解」『東京人類学雑誌』22
- 坪井正五郎 1890「ロンドン通信」『東京人類学会雑誌』52
- 坪井正五郎 1891「ロンドン通信」『東京人類学会雑誌』62
- 野口義麿 1960「いわゆる「遮光器土偶」の変遷」『MUSEUM』109
- 橋本順光 2009「デニケン・ブームと遮光器土偶=宇宙人説」『オカルトの惑星』青弓社
- 原田昌幸 2010『日本の美術 No. 527土偶とその周辺II』ぎょうせい
- 藤沼邦彦 1997『歴史発掘③縄文の土偶』講談社
- 古澤義久 2014「東北アジア先史時代偶像・動物形製品の変遷と地域性」『東アジア古文化論攷1』中国書店
- マンロー, エヌ.ヂ.(水上久太郎訳) 1908「コロボックルに就て」『東京人類学会雑誌』268
- 宮塚義人・梶田光明 1972「東京都八王子市宮田遺跡の調査(1)」『多摩考古』12
- 宮塚義人・梶田光明 1978「東京都八王子市宮田遺跡の調査(2)」『多摩考古』13
- 山田康弘 2013「子どもの考古学」『歴博』179
- 米田耕之助 1984『考古学ライブラリー21土偶』ニュー・サイエンス社
- 鷲尾 功 1962「古代日本にも機密服? じょうもんスーツの謎」『空飛ぶ円盤ニュース』1962 9
- 無記名 1962「宇宙人は日本に来たことがある」『週刊読売』1962 12 9

##### 韓文

- 金用珩・徐国泰 1972「西浦項原始遺蹟発掘報告」『考古民俗論文集』4
- 金材胤 2008「先史時代の 極東 全身像 土偶와 環東海文化圏」『韓国上古史学報』60
- 《朝鮮遺蹟遺物図鑑》編纂委員会1988『朝鮮遺蹟遺物図鑑1 原始篇』

##### 中文

- 郭大順・方殿春・魏凡・朱達・王来柱・呂学明2012『牛河梁』文物出版社
- 郭大順・張克學1984「遼寧省喀左県東山嘴紅山文化建築群址発掘簡報」『文物』1984 11

##### 露文

, . . 1989

、 . . . . . , . . . . . 2002 :  
 . . . . . 2002 3 .  
、 . . . . . , . . . . . 2001 1 .  
 . . . . .  
、 . . . . . 1983 ( . . . . . ).  
、 . . . . . , . . . . . 1973 .

英文

Okladnikov, A.P.1981 *Art of the Amur. Ancient Art of the Russian Far East*. New York-Leningrad.

**【図版出典】**

図 1 1983 , 図 2 1983 , 図 3 Okladnikov 1981 , 図 4 1 ~ 4 1989 ,  
5 , 6 , 2001 , 7 ~ 10 金用珩・徐国泰1972 , 図 5 東京国立博物館ホームページ  
「情報アーカイブ」( <http://webarchives.tnm.jp/archives/> ) , 図 6 藤沼1997改変 , 図 7 1 , 2 江坂1990 , 3 三戸  
町ホームページ「三戸町の歴史と文化財」( <http://www.town.sannohe.aomori.jp/sannohe-history/sannohe-history-top.htm> )